

山田川流域の消長

嶋 崎 幸 次

○わが川、わが里

夏、〃オーカワで泳ぐ〃、〃魚釣りをする〃それは子供達共通の春秋であり、憩いの場であり、遊びの対象であった。このような営みが昔時より繰り返された山田川は、オーカワと呼ばれ親しまれて来た。

この聖き流れの山田川は、奈良県は高山町を源に、かつての山田荘村の西より東へ流れ、その間、権谷川、乾谷川、渋谷川、井関川などを併呑、木津川に注ぐ全長約六千メートル（府内）、流域面積三千百三十九平方キロメートル余の川である。

川の水は、井堰と呼ばれる構造物で堰止められ、井手という水路で田畑へ導き涵養される仕組みになっている。山田区の南側は馬場井手、北側は大井手が年中常時流れ、水路脇の家は各々洗い場が設けられて、洗顔に食物の洗浄に、或いは風呂の水として昭和三十年頃まで使用された。また、用心水としても重要な役割があり、里人の生活の深層まで及ぶ一方、山田川の水は神聖なものとして近年まで、氏神に供物する年二度（一月八日、十月十七日）の神饌餅の洗米水を、砂場に竹を立て注連縄を張って穴を掘り、そこから湧水したのをを用いた。この

ように川の水は昔から清浄視されて来た。オーカワの水と里人の生活とは切っても切れない繋がりがあり、母なる川、聖なる川としてずっと里人に崇められてきた。

流域の村々には数々の利益を与える反面、時に荒れ狂って多大の損害をも運んで来た。

日照りによる川水の涸渇は農作物に被害を与え、村人をして天を仰いで祈り、大雨による氾濫は田畑や橋、農作の大事な施設の水路や堰を崩壊流失させて悲嘆にくれさせた。

それは、柘榴区日ノ出神社の雨乞石に象徴される故事や、昭和二十八年八月中旬南山城地方を襲った豪雨が総てを物語る。前日よりの土砂降りの雨は、川に架かる殆どの橋、井堰、田畑を流亡させ、大きな損失が生じた。

清き流れの川、と山田荘小学校の校歌は高らかに唄う。百魚の棲息した大川は四季折々の村の佇まいを、また村人達の喜怒哀楽を時代時代で映して来たのである。

その清流には、次のような魚が棲んでいた。思い出すままに記す。

鯉、色鯉、ま鮒、へら鮒、うなぎ 緋鮒、なます 鰻、モツ、アカモツ、オビカワ、モロコ、川エビ、スモラ、ドンゴロ、川泥鰌、泥鰌、台湾泥鰌、メダカ、アカハラ、畑泥鰌、シジミ、川田螺、たにし 巻貝、イシクイ、沢蟹、毛蟹等々、名前の不詳のものなど数多く棲息した。これらの魚を狙ういた 鰹やせき 鶴た 鴿たち、それに狩りの名手でルリ色の鮮やかな鳥カワセミもいた。新緑の垂れる柳も岸に生えていた。青年会が毎年挿し木して育て、災害を未然に防いだ。魚釣りは子供達の釣りに停まらず、大人の釣り人が近郷はおろか遠く奈良や東大阪市の瓢箪山、若江岩田あたりの客もあり賑わった。釣師達には人竿料の不用のこの大川は好漁場として知られ、また川魚の種類の豊富な事でも定評があった。投網漁も行われていた。この漁法は直前に蛹の粉末と炒った米糠で団子を作り川の中程に沈めて、目

印しに笹を立てておき、小一時間程して網を投げ入れて捕る。

ドンゴロ釣りは一風変わっている。杭で作られた木の堰、中島堰はこのドンゴロが杭の間に多く棲みついた。ミミズを付けた釣糸を垂らし、それを上下さすと飛び着いて来る。その手応えは、実際やったものしかわからない。付近の状況に合致した保護色のこの貪欲な魚は、身は白く魚特有の生臭さがなく美味であった。スモラも普段は砂をかぶり餌を獲る時は砂上に出る魚であった。川魚全般に、葦が芽を吹く頃が産卵期で一番よく釣れた。マイカキという半月形の網で魚をすくい、大水が出た時は竹竿の先にマイカキをくくり付けて、流れに抗せず岸伝いに遡上する魚を狙って掬った。春先にモンドリという竹で編んだ筒で、なかに糠団子を入れて夕方カマと呼ぶ水溜りに沈めておき、翌朝引き上げると泥鰌がグジャグジャする程入っている。鰻とりの餌やうちで孵化したヒロコの餌にした。鰻の流針は六十センチメートル余の風糸の先に釣針をつけ、餌の泥鰌を刺す。それを夕方川の岸に小杭で留めておき、翌朝引き上げると、鰻や鯰が釣^かっている仕掛けである。

大川に対する細川があった。笛吹と張道の境を西から東へ流れていた川幅僅か二メートル足らずの川で、渋谷川に注いでいた。開発で地中に埋まったが、アカモツや川蝦が多く棲んでいた。

山田川で泳ぐ。それは、学校プールのない時代、子供達の楽しみの一つだった。田に引水のため堰に水が溜められ格好の水泳場となるからである。特に中の堰の滝壺は深みもあり、人気の好水泳場として賑わった。この川遊びで大正末以降（以前は不知）山田区だけで三件の水泳犠牲者がある。水も涸れ汚濁の川となった今から見れば嘘のようなことである。

今、山田川を取り巻く周辺は、慌ただしく変貌しようとしている。泡立つ水は川に住む生物の棲息を否定した。



山田川辻村橋下流（昭和 38 年 8 月）

川だけではない。村も変わった。野兎も消えた。旱害を受け易い山田畑が次つぎに売られ、クズや葺の家が一つまた一つ新築になり、それが競争のようになって村の佇まいは一変した。かつて駆けめぐった山野が、いろいろの問題を内蔵しながら、ニュータウンや学術研究都市に大きく変貌しようとしている。

○里の四季

子供の遊びは、主に年末頃から忙しくなる。それは川での遊びが出来なくなるためだろうか？

凧上げ、めんこ、ラムネ玉、独楽回しが主流を占め、その他キバアと呼ばれるものがあった。それは先頭の子の股下に首を入

れて何人か連なり鞍馬のような格好になり、後の方から助走してその上に乗る。何人も上に乗るものだから重みに耐えられず、へたばるとその者がやり直しさせられる。悪童が常に乗る、弱童がたえず鞍馬にされるのが常で、子供の世界は上位下達で反抗は仲間はずれにされた。

“火の用心”と、拍子木を叩いて区内を廻るのも少年の頃の冬から春までの行事であつた。首締めという鳥獲りも子供の間で流行つた。竹で作る、竹の反撥力で鳥を挟み取るもので、冬場の餌の無くなる頃が好期で山鳩もかかることがあつた。

春の一刻、山菜取りも里人の楽しみ。蕨わらびや薇げんまい取りに時の移るのを忘れた。蕨は頭の赤いのと白いのと二、三種あり、薇も太茎と細茎など三、四種見られた。その他、白色五弁の花の千振り、現の証拠などの薬草、桔梗、竜胆、カゴソウ、ミソ萩、女郎花おみなえし、オトコエシ、撫子、吾亦紅われもこう、野菊などの百草が春夏秋冬を彩り、又、山も蚊のかくすべに使つた檜、そよこの名があるフクラソウ、やま山椒、夕口の木は搗粉木すりこぎに、手斧の柄になるインジユ、春の山を飾る山藤、山桜、アカハシ等々の百木が近辺の野山に溢れていた。

四月三日は春祭。これから忙しくなる農事の前夜祭でもある。嫁いだ娘や息子達が村に帰つて来る。翌日はヤマガリ（ヤマガエリとも言う）に向山の頂上へ、重箱に巻鮎などを入れて近所の友と行つた。それは萌え立つ陽春は八百萬の作物の育成の季節で、翌四日は山の神を迎える大事な日であつた。山の神（民間信仰では秋の收穫後は近くの山に籠もり、春になると下つて田の神になると言う）を迎えに純真無垢の童がその使者として行き、山の神と共に頂きで宴を開くのが、その年の平穩豊穰に連なると考えられた。幸は山の彼方より神々がもたらすものと信じられた。

非柿の花は細かい藤色、甘酸っぱい匂いを、又、木々の若芽も官能的な芳しい薫りを四散させて、農神を迎えるには誠に絶妙の舞台装置だ。山頂よりの眺望は眼下に木津の町、遠くには泉川の上流笠置連峰が望まれ、南に三笠山、北に蛇行する木津川の流れが輝いて見えた。

春爛漫は子供心を浮き立たせ、日の暮れるのを忘れさせた。

これは戦争中に知らぬまにすたれ、今又、向山はニュータウンの造成で崩された。赤砂の採れた山も無くなれば、正月を演出する材料も無くなってしまうのだ。

初夏になると、キリス採りをした。葱の白根を棒先につけて、スウーっと近づけるとキリスは葱に飛びつく。そつと手前に引いて来て捕えた。また、夕方は菜種がらを束ねて箒を作りそれで蛭をからめて捕り、蛭は葱の葉筒に入れた。

昆虫採りは続く。櫟や榎の木の根元に鋤形虫、兜虫、カナブン、雀蜂がおり、時に虻がいることもあった。夕方蚊蜻蛉が乱舞し竹枝での箒で傷つけないように押さえて捕る。池の水面に雌雄連なったヤンマの雌を捕まえて糸に結わえて飛ばすと、雄ヤンマがつるみに来る。つるんだ処を手元に引き寄せ網で押さえる。鬼ヤンマといった一廻り大きな蜻蛉、細い糸トンボも腰に白の筋のあるものも、赤いトンボも多くいて、結構、子供の遊びの対象であった。

茶摘みが終われば、籠やぶりといって必ず破竹の筍と路とを使つた五目飯が作られた。山にその頃、ヤマナシという地這いの植物が淡紅の花を咲かせ、菊形の小さな果実が実る。サクリとする舌ざわりの鉛筆の頭程のこの実は美味であった。粘液を出すモチツツジ、山桜、藤と、山は春から夏へと大きく変貌を遂げて行く。

秋祭りの太鼓が聞こえると、松茸の季節となり、山に縄が張られる。どんなわけか知らぬが茸のよく生える場所をナンドと呼び秘密にした。占^{しめじ}地、黄占地、ネズミ足、ハツ茸、黒ハチなどの茸類が人を山に招き、村人は競って山の幸で食卓を賑わせた。夏櫨の黒い実、赤い角張ったコシキの実に、童達ははしゃいだ。

○息女と行者はん

山田区の東北の山麓の小高い所に普賢院がある。その普賢院の不動明王や仏達のこととは精華町史編纂参考資料版1「精華町の寺社と美術」の記述と重なるので点綴はしないが、普賢院が蔵する位牌群のなかに異彩を放つ一基がある。その位牌は台座を喪失しているが、軸は黒漆塗で上部に金色の菊花紋を冠し、

表 井^{マヤ} 露王院高慶長老大尼 傳儀

裏 近衛應山御息女

と、記してある。この御息女 of 消息を関係者に尋ねてみたが定かでない。しかし、どうしてこのようなものがこんな処でなぜあるのか。そして、その意味するものは……

近衛應山は誰なのか。調べてみると、なんと第百七代後陽成天皇（一五七一―一六一七）の皇子である。本阿弥光悦、松花堂昭乗とともに寛永の三筆と称せられた近衛信尹^{のふただ}の養嗣子になった人で名は信尋、号は應山と言い、近衛前久^{オホキミ}、信尹、信尋（應山）共、近衛家中興の人物で、又近世初頭の文化興隆に大きな役割を果たした人達である。その後陽成天皇の皇子信尋こと應山の御息女の位牌が、この普賢院にあるのだ。故あつての事であるうが、息女については今の処不明でそれ以上追跡できない。しかし、菊花紋を戴冠する位牌は普通のもので

はない。戒名の上にある記号のようなものはなにか？ 又どんな意味があるのか。辞書を頼りに調べると、

「井」は「井」或いは「井」でバウ・ボダイ。「菩薩」の略字。開訓義、ボサツ、「菩薩」の略字。「菩薩」の草冠を合わせた字。ササボサツともいう。「井」開梵語、(Bodhisattva) 菩提薩埵の略。大道心衆生、道衆生、覺有情大士、高士などと訳す。大勇猛心をもつて菩提(サトリ)を求め、大慈悲心をもつて衆生を救わんとする者。仏につぐ位置にある人につける。いにしえ、朝廷から硯徳の高僧に賜った號。

それでは「菩提」についてみると、「菩提」梵語 Bodhi の音訳。道・覺・智と訳し、道は悟りに至る因となす意。覺は煩惱を断ち切つて悟りを得る意。智は煩惱と知識の障りを断ち切つて得た正しい智慧の意。俗に、追善冥福の意にも用いるとある。

最後に戒名の下にある「傳儀」についてみると、尊い姿の意で、仏・菩薩の像や貴人の肖像、位牌などの尊敬語とある。名前や没年月は不明だが、位牌の語りかけてくるものは甚大である……。推察するに、この方は庵主として、この地で終生を遂げられたか、或いは所縁のある人であつたのではなかつたか。口伝等は事情あつてか世俗の識る処でなく覆われているが、物の証である位牌の存在をどう視るべきか……………

普賢院の以前の建物は、高床で周囲は廻り廊下があり、寄せ棟の一風變つた容姿であつたが、先年、風雪で朽ち果て惜しくも倒壊した。

東隣の庫裏に仏像などは移されたが、これも朽ち、整地されて今は老人達の歓声挙がるゲートボール場となつた。区民の中に、このまま放置するのもどうか、との声が起き、昭和五十三年頃ブロック造りの館が出来て収蔵された。毎年、春に護摩が焚かれ、信奉者に依つて香の煙が絶える事なく、又、数年前より兵庫県相生市の沖

合十キロメートル余にある家島からと言う信者がバスで月一回当地を訪れ参詣されている。所縁に連なるものがあるからとの事である。

普賢院は真言宗京都御室の仁和寺の末寺と言われるが、もとは医王寺の塔頭の一字としてあつたのではなからうか。

牛頭ごずだいおう天皇をまつる神社の境内の十三重塔(重文)、薬師さん、栢榴の寺にある伊王寺銘の名鐘、所々にころがる石、そばにある池の堤防の土の中や池に多数の埋まっているという石群。今度、京奈バイパスがこの池の上を通る予定と聞く。又、上中、下中、樋ノ口に各一基の石燈籠が道端にあり、農業倉庫の西側にも大きな石燈籠が一基あるが、どんな意味を持つかわからない。

この普賢院の西南約一キロメートル余の位置に、かつて「行者はん」と親しみを込めて呼ぶ地にその名の行者像があつた。修験行者像は松籟のなかにひっそりと佇んでいた。

四十センチメートルの台座の上の岩に腰掛けた石造りの行者は、右手に金属製の錫杖、左手に巻物を持って顎髭を蓄え、頭衣を被った顔は温和で見る人の心を引き寄せるものがある。だが、修験行者にありがちの一本歯の高下駄ではなく、なぜか二本歯の高下駄を履かれている。

石の台座の四面には経文の刻字があり、南面から「佛説摩訶般若波羅密多心經……」で始まる唱文が彫られ東面の末尾に「般若心經」とあり、「嵒 寛政三年辛亥年四月吉祥日」と銘がある。「嵒」はジと読み、「時」の古字である。一七九一年の刻佛で、土地の人は大和高峰の山の行場に行けない者が、ここに詣でて修業を果たしたという。

先年、ニュータウン造成のため、松籟の地を出られ、精華町と奈良県の境の石のカラト跡近くに移され、又、そこも追われ、昭和六十年二月に現在の長櫃の山上に鎮座された。これも仮の地で安住の地定まらず流転の身である。今尚、不断の修法を重ねなければならぬ身の上や、人の世の心のうつろいのさまを苦笑されているかもしれない。いずれ近い将来、小公園の一隅に置かれ、そこに通ずる道を「行者の道」と名づけて祠堂されれば安堵されることだろう。その外、ホテンドと呼ばれる地に清水の湧く井戸があるが京奈バイパスが出来るとどうなるのだろうか……又、ビシャモンと言う処には昔、小さな祠があったが、今はどうなっているのだろうか。

○里の農事暦

春、桜が咲きフジが房を垂れると急に忙しくなる。花の開花は気温の上昇もさる事ながら、地温とも深い関わりがあり、特にフジの開花は農事のシグナルである。フジが咲けば里芋や甘藷、果菜類のナスやトマト、西瓜等を植えつけられる。晩霜の心配がなくなるからである。これは長い経験に基づくもので親から子へ、孫へと伝授されて来た事である。田畑の耕起も毎年少しずつすすむように畝作りし、溝を掘って藁を敷き、数年で田全面が深耕されるよう考えて作業が進められた。

天地返しという語が示すように土を深く反転させて風雨に晒し、土が理科学的に変質する工夫がされ、作物は耕す回数に比例するように良く成長すると教えられた。耕す事は除草になり、除草はまた耕す事であった。田の四隅を深耕すれば、お伊勢詣りの費用位は捻出できると言われた。しかし、これらは時代の波に風化し死語化した。田植は夏至前後が最盛期で、種まきから四十九日目は「苗ヤク」と言つて忌み、田植を休む風習があった。

田植が終わると“農休み”が区単位で行われ、節目とされた。田植後カジタと言う中耕は苗の間をヨコから始まり田全体を隈無く耕し一週間後、今度はタテに田を耕すが、水中での作業であるので、とぼしるで腰から下はずぶ濡れになる事が往々であつた。カジタ用の鍬は三又で鑄製、土がよく腐るので使用された。車押しも縦横、田じゅう這い廻す手による草取りは、アゲ草まで二、三度、雨の日はゴザ蓑で八月中頃まで一家をあげての作業。“八月大名”という語があるが、水の駆引き、家畜の世話と間断なく労働は続く。又、養蚕は春蚕秋蚕と、麦秋、秋収と重なり繁忙を極める。

九月の二化メイ虫発生期は、誘蛾燈が設置、夕方交代で石油の補給と点火、夕闇をユラユラと照らし蛾を捕殺した。

十月半ば早稲刈り、中稲、晩稲と続くが、一人が刈り出せば負けじと早刈りする者が現れるので“鎌留め”といつて地区で一週間位稲刈りを中止させた。それは農民心理として、他人より早く野良仕事を終える事は優越感になつて他人を嗤い、他人より遅れる事は屈辱的劣等感となつて他人から嗤われるのである。ひとを嗤うことは甲斐性者であり、嗤われる者は甲斐性無しで、それはたえることの出来ない事なのである。それで作物の登熟の遅速に関係なく競うのである。考えてみれば馬鹿げたことだが、収入を度外視した高価な農機具が購入されるのはここにも原因がある。さて、刈られた稲は稲架という長竹と二メートル位の支柱を使って組み立て、稲を架ける。稲刈りが終わると“刈り抜け”といつて、新小豆で飯を炊き稲刈りに使用した鎌などを箕に入れて、酒と赤飯を供へ、その労をねぎらい、又、神や佛にその無事を報告した。“十夜”の刈り抜けという語もあつた。稲架掛けは一週間から十日程が目安で藁、粃とも乾くのと、もう一つの重要な意味があつた。それは逆さに架ける事と日

中と夜の気温差で粃が熟成されウマ味が増し、のち脱穀した粃はむしろで柔らかい、秋日での天日干しは、更に味を、質を向上さす効果があった。機械農法は暑い時期の登熟と即脱穀で米の味を不味くした。

稲こきは昔、湾曲した千歯と呼ばれる器具（麦用は平面で丸棒、間隙は稲用より広い）から足踏稲扱機、戦後の昭和二十三年頃より動力脱穀機、更に昭和五十年代になるとコンバインとなる。麦作りは昭和四十年頃より廃れた。足踏稲扱機頃までは“こき抜け”といつて、脱穀に使用した農具を“刈り抜け”同様供し神佛に感謝をした。脱穀した粃は筵で柔らかい秋の日差しに干し、古くはキッコマッコと呼ぶ人力土臼で挽かれた。今でもウスヒキと呼ばれるのはこの名残りである。現代は粃摺機に取って変わった。

秋が深まると鶴の子という紡錘形の柿が鮮やかな色になる。母はよくこの柿を使い湯抜きという方法でさわせた。そして子供の間食（ナンド）として与え、又、子供もそれを欲した。

製法は沸騰の湯をよく掻き回して水をなごませ、樽に入れた柿の上に環にした藁とワラビの葉茎でよく押さえ、先ほどの湯を注ぎ蓋をする。それを風呂をすませた湯の中に樽ごと入れて桶の湯が冷めないようにし翌朝まで置くと、どこか酒気の匂いと甘酸っぱい香りの渋抜き柿が出来た。風呂湯の代わりに粃摺ヌカのなかに入れることもあった。このさわせ柿は木成りの柿より毒にならないという事であった。

渋抜き（タンニンの固定）は藁や蕨の葉茎のアクと温湯で渋が手軽に抜けるが、日持ちが悪く翌日には駄目になった。開発でその柿も無くなり、おふくろのさわせ柿も姿を消した。

又、鶴の子柿の干し柿も農家の晩秋の風物詩でもあったが見掛けなくなった。

麦まきを終える頃は十二月、“秋しまい”といつて、新穀の糯で餅を搗き、新小豆で餡を漉し、親戚や結仲間

に配り神佛にも供えて五穀豊穰を感謝したものである。コンバインの出現はこれらの素朴な風習も、その音で駆逐した。

現代のように種播きから収穫まで総てに金のかかるようになると、天地に対する考え方も変わってしまうのであろうか……牛馬での耕作の頃は収穫まで肥料代以外の金は殆ど要らなかったし、肥代は年末節季で決済された。

さまざまな農機具と農薬は、農民をして重労働より解放したが、生活を圧迫する皮肉な結果をも招来したのである。

○辻村橋とガタガタ橋

木津川河口から奈良県境の両国橋までの約六千メートルの山田川に架かる橋は、現在二十一橋ある。又、田畑に引水する堰は、以前はすべてセメント製で二十三堰あったが、現在では半分の十一堰ですべてがファブルダムである。橋は昭和十年頃は十五橋ほどで、その大半が木橋か土橋であった。その中から、記録がある永久橋にかわった辻村橋と、今は流失して名だけが残る雁行のガタガタ橋の二橋を記してみよう。

*辻村橋は、十戸程の戸数で建造、維持管理して来た橋で、山田川駅の西約百メートル余にある。辻村垣内が所蔵する天保十四年（一八四三年）正月吉日莊嚴箱と墨書のある木箱に「明治九年子九月八日土橋掛入用覚書」と「昭和十年自五月辻村橋工事人夫控」の二冊の綴り帳が残っている。

それに依ると、土橋は維持や流失で出費が嵩むので昭和十年、コンクリート橋に架け替えることにし、その測

量、計画書の府庁への提出や、又、コンクリートに使用する砂利等、現場で採取したとある。自分達で出来る事はなんでもこなす、今風に言えば手作りの橋でしかも立派に欄干まで付けた自動車も通れるものだった。当時は樽入りのセメントや型板の材料費、大工賃等は、篤志家と垣内の各自が家相応の金額の寄付を持ち寄ることで賄い、又、人夫も自分達の奉仕をもって充て、同年十月中旬に見事に完成している。この「おらが橋」が山田川に架橋する他橋と相違するのは、村や府が管理していた橋でも木橋の多かったその頃に戸数僅少な垣内が独自に立派に橋を架けたという点である。

馴れない仕事、川という出水の特異性、農繁期を避けての工事は事古に尽くせない難渋を極めたのであろうが、一致団結して辛苦を克服したのは価値ある事である。これは後年役立った。というのは、すぐ南側にある山田横断地下道である。国道の建設にこの僅かの戸数の人達が、将来の危惧を察知して当局と強談、ついに地下道を実現させたのも、この辻村橋架橋の時の自信が下地にあった事は否定出来ない。

昭和二十八年、南山城を襲った水害は鉄道橋を除く橋と一部の堰を除き流失。辻村橋もすぐ下の下井手堰の崩壊で足元をすくわれ三分の二が落下した。すぐ垣内の手に依って応急の橋が作られ、のち一部地元負担で転落部だけ再築、昭和五十八年山田川改修で現在の橋になった。コンクリートの川は昔時のような魚の棲める川ではなくなった。橋に掲かる川銘板の「川」の字の三画目が「ㄣ」字形に曲がっているのは、曲線の反撥力でもとの川魚の棲む川に戻れ、昔時の姿に甦れとの希いをこめて表記されている。

*橋を渡ればユラユラ揺れる橋は、上中高ノ原線の延長線上にあった。人一人がやっと通れる木橋で、丸太や梁桁の廢材を二、三本縦に並べた雁行橋であった。手スリがなく、ひょうつけば必ず川に転落する危険なもので、

臆病な子供には到底渡れる代物ではなかった。田畑に行く近道になるため馴れた大人は鍬をかついで巧みに渡って行く。勇敢な悪童が橋の途中で天の橋立の股覗きまがいに覗けば、またそこに違った風景があった。ガタガタ揺れる処からの命名で、今も近くの人がガタガタ橋と追憶をこめて呼ぶが、この橋も南山城水害で流亡したのは、橋畔がかすかに残っていたのであるけれども、川の改修で跡形も無くなった。

将来架けられるであろう橋は、このユニークなこの橋名を知らないだろう。ともかくも面白味のある橋だった。

○相場^{そばふ}振り山^{やま}

今、相楽ニュータウンの造成工事ですっかり原形を留めなくなったが、ソバフリ山と伝承される山があった。ごく平凡な山であるが、西にも東にも見通しの出来る処に位置していた。

現代は通信技術の発達で世界の果ての出来事でも、寸時に伝達が出来、人工衛星の働きで宇宙から或いは遠隔の地球上のあらゆる所から映像さえも届けられ、ますますこの地球も狭くなりつつあり、又、交通機関の発達で世界中を短時間で訪れる事が出来ることになった。しかし、飛脚か早馬しかなかった時代に情報を連絡する手段として、こちらの山から遠くの峰に、更にその向こうの頂きへと狼煙^{のうし}を上げて伝達していた一つの中継点が、この山だったという。狼煙には戦略的なもの、兵変、政変や一大異変を伝えるものがあるが、相場振り山の名の由来からそんな生臭いものではなく、株や米等の商品の動向を知らせる産業的なものであったと推察する。ソバフリとは多分、相場の動静を振り知らせる意からついた名で、種々の相場を伝達した山である。



山振相場

八年前、その地を初めて訪れた時はまだ山容は元のままだったが、造成は進んでいた。昭和五十五年四月初めに写真を撮ったのが今手元にある。その時の印象は、相場振り山はこの付近では一番見晴らしのきく好位置にあった。

又、その近くにウシの墓と呼ばれる処やコレラ山と伝えられる山もあった。田畑の耕起に利用した牛が病に倒れた時に埋めた処であり、コレラが流行し大勢の人が罹病して死んだ時、人里離れた処へ埋葬したのでこのような名がついたのであろう。故事に「滄桑の変」が記されているが、私達の祖先がよもやこの地が学研都市の一翼を担う地域になり、屋が連なるとは……

ちよつと大袈裟だが「光緑池台錦繡を開く」とは夢想だになかったと思う。かつ

て頭を挙げて山月を望み、頭を垂れて田毎の月を眺めた処が、住居と化してしまうのに、そう多くの時を要しない。

尚、この近辺の地名に、長櫃、菅井櫃と櫃のつく名が残っており、又、風灰、笛吹、耳所、地獄谷、兜谷、すくしたに噤谷などと、風変わりな地名が残っている。

亡父が噤谷の田を耕していた時、多数の素焼の器が土の中より出土したと話していたことを覚えている。口を噤つぐむとは、隠れ住んだところからの出名だろうか……

○莊嚴とムジヨウ講

山田区には、莊嚴と呼ばれる宴がある。辻村垣内に例をとれば、男子十五歳になった二月二日の莊嚴に出し前として酒肴料を出して、息子の成人を垣内の人達に認めて貰い且つ祝福して貰う風習である。

萬延二年（一八六一）儉約取きまり帳と書かれた綴り帳には延々現代まで、その出し前の記録がその都度書き込まれている。希有な帳面である。それには嫁取り、婿取りの場合の垣内への酒肴料の出し前、戦中戦後の疎開者の仲間入りに記されている。具体的に言えば、昭和〇年〇月〇日、何某が清酒一本、肴料何円、或いは白米何升といった具合にその祝いの内容が克明に書き込まれている。その帳面を見れば、何某が何年に嫁取りをしたと言う事が判り、生きた垣内の歴史書でもある。莊嚴は二月二日と決まっており、宿は順番制である。また家に不幸があつた年は参加出来ないし、女子の宴の出席や接待も禁じられている。この莊嚴の日も、勤人の都合で数年前より二月に入つた最初の日曜日に変わり、組内の世話人を決める年一回の大事な顔合わせの宴でもある。以前

は「日待ち」と呼ばれるものもあったが廃れ、その他、伊勢講、愛宕講などの「講」もあったが時代の推移と共に消滅した。

さきの大戦頃まで、組内の種々の会合はムジヨウ講と呼ばれ、重要な会合はフサンナシのムジヨウ講と言って、宿当番がその旨を触れ廻れば、万障繰り合わせて出席しなければならないようになっていた。このシヨウゴン、ムジヨウ講は共に仏語に関係するかに思えるが、忌服を嫌う処を見れば仏事ではない。ムジヨウ講も吊いの手伝いではなく、会合を指す処から関係ない。莊嚴、ムジヨウ講共その由来、語源は不詳である。フサンナシは不参無イコール欠席のないようにとの旨である。今の回覧板は回状と言い、隣組長をジュウチョと言って「区長の九より十が上」などという戯言が生まれた。